神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

係助詞「コソ」の構文史：近代日本語構文の成立に関連して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 1991-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安達, 隆一, Adach, Ryuichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2125

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

係助詞『コソ』の構文史

——近代日本語構文の成立に関連して——

安　達　隆　一

はじめに

本稿は，≪係り結び≫構文の消長が近代日本語構文の成立に果たす役割について，室町時代の日本語構文の存立状況を直接の対象として，いささかの私見を述べようとするものである。

日本語構文の史的展開の原理を，文の≪格関係≫と≪係り結び関係≫との相互関係に求める見解は，森重敏（1959）・尾上圭介（1982）がつとに説いたところである。尾上によれば，

> 文の基本構成を史的に考察するとは，この論理的格関係の現れ方と係り結び的断続関係の現れ方との相互関係を問うことでなければならない。(1)

のであり，さらにいえば，日本語は統語論的には，≪係り結び関係≫に依存する構文から≪格関係≫に依存する構文へと展開してきたということになる。

この原理に照らしてみるとき，近代日本語構文とは≪格関係≫による構文法が定着をみる構文であり，それと相補的に≪係り結び≫構文が衰退する構文であると，ひとまず規定しておくことができよう。

日本語構文において，≪格関係≫優位の趨勢が顕在化するのは室町時代である。その意味で，室町時代は近代日本語構文の成立期にあるとすることが許される。換言すれば，室町期の言語状況のなかに近代日本語構文成立の過程をたどることができるということでもある。

（1）「文の基本構成・史的展開」からの引用による。

≪係り結び≫構文の史的変遷をたどる考察は，総じて≪係り結び≫の表現機能に焦点を当てることで，その衰退現象を説いてきたといってよい。その論の多くは，係助詞と呼応関係にある述語の形態的異同の記述から始めて表現機能の限定に至るという方向を志向する。あるいは現象的には，連体形終止法の一般化，仮定表現の変遷などに関連づけるというものである。その限りにおいてそれは，≪係り結び≫構文の語用論的な立場に立つ考察ということになろう。考察の量的な拡大にもかかわらず，語用論的な見地からの考察がある種の飽和状態に達していると観ぜざるをえない。また高山善行(1988)の指摘するように，統語論的な問題がすべて統語論的曖昧さを残したまま語用論的な問題に解消されることは決して望ましいことではない。(2)

≪係り結び≫構文はいうまでもなく，係助詞が特定形態の述語と呼応関係を結ぶことを特徴とする構文である。厳密には，係助詞の承接成分が述語層との意味的呼応関係にあることにおいて，述語が特定の形態を取るというべきであろう。その意味において，≪係り結び≫現象はすぐれて，文の統語論的な面にかかわる。したがってまずは，統語論的な立場からの考察を優先させるべきだと考えるのである。

このような認識に基づいて，本稿では，≪係り結び≫構文の史的変遷つまり衰退現象について統語論的な面から考察を試みるものである。

≪係り結び≫構文の消長と近代日本語構文の成立との交渉を統語論的に解明しようとする本稿では，その対象を係助詞≪コソ≫による≪係り結び≫現象に限ることにする。室町期になると，少なくとも口頭語の資料では，≪コソ≫を除く≪係り結び≫現象が著しく減少するからである。また室町時代の言語資料としては，『天草版平家物語』を資料の中心にすえる。『天草版平家物語』は，口頭語の資料という特徴のほかに，『原平家物語』ともいうべき

(2) ≪係り結び≫とりわけ≪コソ—已然形≫における結びの乱れの記述は，現象の記述たりえても，≪係り結び≫崩壊の統語論的解釈たりえない。語用論的な解釈の高論としては，山口明穂（1965）・安田章（1980）をあげるべきであろう。

対照可能な原拠本をもっており，口訳者の語用論的な制約をさし引いても，資料としての価値が高いと判断するからである。[3]

本稿は具体的には，次のような考察段階を経る。

(1) 係助詞≪コソ≫の承接する文の成分の諸相

(2) ≪結び≫としての述語の形態の異同

(3) ≪係り結び≫構文の近代日本語構文成立への関与性

なおその際，係助詞≪コソ≫による≪係り結び≫構文が『天草版平家物語』及び『原平家物語』ともに一致する場合と，『天草版平家物語』が≪コソ≫による≪係り結び≫構文を排除した場合とを区別して扱うものとする。原拠本に一致する≪係り結び≫構文は，その古態の遺存状況を示すと，ひとまずはいっておくことができよう。そして≪係り結び≫構文の排除されるなかに，その展開をみることができると考えられるのである。

1. 係助詞≪コソ≫の承接する文の成分の諸相

≪係り結び≫現象が統語論的な問題であってみれば，係助詞が文のいかなる成分に承接するかということがまず問われねばならない。≪係り結び≫構文を係助詞の承接成分に着目した論考は，管見に入る限りでは意外に少ない。[4]

まずは係助詞≪コソ≫の承接成分の分析から考察を始める。なお資料は，『天草版・百二十句本（斯道文庫）・覚一本（岩波大系）』の順に提示する。

(1) ＮＰ＋コソ

① 平山進み出て申したは：この山の案内は<u>私こそ</u>知ってござれと，申せば：（巻第四・第六258—24）

平山武者所季重進出テ申ケルハ此山ノ案内ハ<u>季重コソ</u>知テ候ヘト申ス

② 夢まぼろしの世の中はとてもかうでもござらうず：ただ長い世の<u>闇こそ</u>心憂うござれと申して（巻第四・第十三311—16）

（3） 安田章（1980）によると，『天草版』の≪コソ—已然形≫は，会話文において遺存するという。またその使用法は敬体表現にかかわるという。

（4） 承接成分に着目する論には，係助詞≪ゾ≫について小田勝（1989）の論がある。

夢幻ノ世中ハトテモカウテモ候ヒナン，只長夜ノ闇コソ心憂ク候ヘ

夢まぼろしの世の中は，とてもかくても候なん。ながき世のやみこそ心うかるべう候へとぞ申ける。

③　味方はみな落ちゆくに，ただ一騎残って軍をするこそ心にくけれ：（巻第三・第四170—6）

ミカタハ皆落行ニ只一騎残テ軍スルコソ心憎ケレ

①②は体言であり，③は連体句である。≪NP＋コソ≫は体言・連体句のいずれにせよ，主格用法に限られる。主格用法に限られる≪NP＋コソ≫は，係助詞≪コソ≫の結びが已然形であるとないとにかかわらず，近代日本語構文の主格における格助詞≪ガ≫と係助詞≪ハ≫の対応関係に照応する。現代日本語の主格における取り立て助詞≪コソ≫が排他的な意味機能に限定されることからすれば，係助詞≪コソ≫が本来的な機能を保持しているとみなすことができよう。また例③の連体句が体言的機能を保持していることは，≪コソ—已然形≫構文の残存状況へのかかわりとして，指摘しておいてもよいであろう。

係助詞≪コソ≫が本来的な機能を残存させている反面，対格における≪NP＋コソ≫がみられないことには，係助詞≪コソ≫の機能の縮小という，史的展開としては当然の現象が指摘できる。

④　いかにとかやこの名こそ忘れにけれ。（源氏物語・幻）

この御手こそ久しく見ね。（宇津保物語）[5]

⑤　さござればそれがしをば大兵とおぼしめさるるか？わづか十三束こそつかまつれ。（巻第二・第十151—11）

サ候ヘハ某甲ヲ大矢ト覚シ召候カ，僅ニ十三束コソ仕候ヘ

平安時代にみられる④の構文は，『天草版平家物語』では例⑤を認めるにすぎない。しかしそれとても，数量詞≪十三束≫にかかわる成分である。数量詞は，

（5）　山田孝雄「平安朝文法史」による。

⑧　その儀ならば，北面の輩矢をも一つ射ようずる侍どもにその用意せよと，触れい：（巻第一・第六43—6）

のごとき用法からすれば，例⑤も

⑤　わづか矢ヲ十三束こそつかまつれ。

と解すべきであろう。

(2)　ＮＰ＋Ｐ＋コソ

格成分に係助詞≪コソ≫が承接する≪係り結び≫構文は，格助詞を顕在させつつかなり多領域に及ぶ。係助詞≪コソ≫の承接する格助詞は，≪ヲ・ニ・デ（ニテ）・ヘ・ト・ヨリ・カラ・マデ≫である。この承接状況は，≪ヲ≫を除いて現代日本語のそれと変りはない。対格無標示成分における係助詞≪コソ≫の排除は，結果として格助詞≪ヲ≫の顕在する対格成分に≪コソ≫が承接する≪係り結び≫構文になる。

⑦　けふよりのちは珍しい東男をこそごらうぜられうずれとうち笑はせらるれば：（巻第四・第十八343—13）

今日ヨリ後ハ珎シキ東男ヲコソ御覧センスラメトウチ笑玉ヘハ

例⑦の構文は，前時代にも当然多く例をみるのであって，この時代の構文的特徴とばかりはいうわけにはいかない。しかし対格無標示成分への承接から係助詞≪コソ≫が排除されることは，格助詞≪ヲ≫の顕在現象とあいまって，≪係り結び≫現象の後退への統語論的関与性をもつとだけは指摘できるであろう。

≪コソ≫の承接する格成分は，格助詞を除くと，副助詞≪バカリ≫・係助詞≪モ≫の承接する成分である。

⑧　やがて後世のお供をつかまつらうずることなれども，この世には姫御前ばかりこそござれ：後世をとむらひ参らせうずる人もござなければ，しばしながらへて，後世をとむらひまらせうずると言うて（巻第一・第十二91—20）

やがて後世の御供仕べう候へ共，此世には姫御前ばかりこそ御渡候へ，

後世訪ひまいらすべき人も候はず。しばしながらへて後世をとぶらひまいらせ候はんとて

⑨　あらあさましや！　人もこそ見まらせうずれと申して，急ぎ引き入れ奉れば（巻第四・第二十六384—11）

穴アサマシヤ人モコソ見候ラメトテ急引入奉ル

あなあさまし。人もこそ見まいらすれとて，いそぎひき入奉る。

この用例は量的にはきわめて少ない。⑧⑨各々二例づつ四例ほどを数えるのみである。≪コソ≫はいずれも主格成分に承接する。管見に入る限りでは，前時代の状況に比べて衰退の傾向にあることを推察しうる。係助詞・副助詞の相互承接に関しての詳細は，構文史的には興味ある問題ではある。今はそれに触れるまでには至っていない。

(3)　ＶＰ＋Ｐ＋コソ

係助詞≪コソ≫が接続条件句に承接する構文では，≪コソ—已然形≫の呼応関係を保つ限りにおいて，文における統語論的機能を有する。それとともに，連体句への係助詞の関与はありえない。≪コソ≫が接続句に承接する様相は，原拠本に対応する限り，前時代のそれに異ならない。

⑩　さうあるところへ西八条から使ひしきなみに立ったれば，宰相行き向うてこそともかうもならうずれと言うて，少将も，宰相の車の尻に乗っていでられた。（巻第一・第五37—20）

去程ニ西八条ヨリ少将遅シト云使敷波ノ如シ。宰相左モ右モ行向テコソトテ出ラレケレ。少将モ車ノ尻輪ニ乗テ出玉フ

西八条より使しきなみに有りければ，宰相ゆきむかふてこそ，ともかうもならめとて出給へば，少将も宰相の車のしりにのりて出られける。

⑪　世にあればこそ望みもあれ，望みのかなはねばこそ恨みもあれ，しかじうき世を厭うて，まことの道に入らうずるにはと，言はれたれば（巻第一・第五39—20）

世ニアレハコソ望モアレ。望叶子ハコソ恨モ有レ。不如憂世ヲ厭ヒ真ノ

道ニ入ナンニハトソ宣ケル

世にあればこそ望もあれ，望のかなはねばこそ恨もあれ。しかじ，うき世をいとひ，真の道に入なんにはとぞの給ひける。

(4) Adv＋コソ

⑫ 木曽さればこそと言うて，二万騎を入れかへて，鬨をどっとつくってをめいてかかったれば，平家しばしこそささへたれ：志保坂の手をも追ひ落されて，加賀の国の篠原へ引き退かれまらした。（巻第三・第三168—24）

木曽サレハコソトテ二万騎入リ替テ時ヲ作リヲメイテカク。平家暫コソ支ケレ志保坂モ追ヒ落サレテ加賀国篠原ヘコソ引退キケレ

⑬ 土肥の次郎いしうも申された田代殿かな！ それがしもかうこそ申したうござれ，と申した。（巻第四・第六255—7）

土肥次郎イシウモ申サセ玉ヒタル田代殿カナ。真平モカウコソ申度ウ候ヒツレトソ申ケル

⑭ 少将は成親の嫡子であれば，うとうもあれ，親しうもあれ，えこそ申しなだむまじけれ：（巻第一・第五39—2）

此少将は既彼大納言が嫡子也。うとふもあれしたしうもあれ，えこそ申宥むまじけれ。

⑮ 通盛の上を見れば，かしこうこそ幼い者どもを都にとどめおいたれとあって，泣く泣く喜ばれた。（巻第四・第十288—10）

越前三位ノ上ヲ見レハ賢クコソ稚キ者トモヲ都ニ留メ置キケルソトテ泣々悦玉ヒケリ

⑯ 上人世にめでたうこそござったれとあれば，なのめならず喜うで，さらば疾う切れとあって，首をのべて切られさせられた。（巻第四・第二十—365—15）

善知識ノ上人世ニ目出コソ渡セ玉ヒツレト宣ハ斜ス喜テサラハ切レトテ頸ヲ延テソ斬セラレケル

⑫⑬⑭は副詞に，⑮⑯は形容詞（連用形）に係助詞≪コソ≫が承接する例である。一般的にいって，係助詞≪コソ≫が副詞に承接する構文にあっては，副詞そのものが意味的呼応関係の密なるをもって機能する成分であることからして，≪コソ—已然形≫の関係は他成分におけるよりも統語論的一体性を残存しやすいということがいえよう。ただしそれだけに≪コソ—已然形≫が慣用的な形式として固定化するということでもある。

形容詞（連用形）に係助詞≪コソ≫の承接する用例はきわめて少ない。その中にあって句的相関関係にある構文と，語的相関関係にある構文とを区別すると，少ない中にその二類を見ることができる。前者は≪シク活用≫形容詞であり，後者は≪ク活用≫形容詞のそれである。そして前者は例⑮がそれに当り，後者は例⑯がそれに当る。

『天草版平家物語』とその原拠本との間において一致する≪係り結び≫構文について，係助詞≪コソ≫の承接する文の内的成分から，その諸相を一覧してきた。原拠本に比較的正確に対応することからすれば，係助詞≪コソ≫による≪係り結び≫構文は，衰退現象を示すというよりもむしろ≪コソ≫構文本来の広がりと機能を存しているとさえ考えられよう。しかし全面的に古態が遺存するかに見える中にも，係助詞≪コソ≫の領域の狭まり及び機能の固定化はかいま見ることができるのである。

2.　≪結び≫としての述語の形態の異同

≪係り結び≫構文とりわけ≪コソ—已然形≫の史的展開に関する問題は，おおむね≪結び＝已然形≫の異同つまり≪結びの乱れ≫という現象から論じられてきた。現象の記述はそれはそれとして意義のあることであり，その価値を否定すべきものではない。ただし現象の記述をもって構文史を充足すると考えるならば，≪係り結び≫現象の統語論的な価値を見失うことになるであろう。

前節において一覧した文の内的成分に承接する≪コソ≫は，量的な多寡こ

そあれ，そのすべてにおいて≪結び≫の異同を有する。いわゆる≪結びの乱れ≫が存するのである。

『天草版平家物語』の≪コソ≫をその原拠本との対照において，口訳者の言語使用意識という観点から詳説した安田章（1980）の成果を斟酌するにしても，なおかつ≪結び≫の広範な異同は，口訳者の言語使用意識を超えて≪係り結び≫現象の変遷過程を反映するとみなさざるをえない。

まずは次の文から始めよう。

⑰　これこそそよと言ひもあへず，手に持ったものを投げ捨てて，すなごの上に倒れ伏された。（巻第一・第十二86—14）

是こそそよといひもあへず，手にもてる物をなげ捨て，すなごの上にたふれふす。

原拠本との照応において，この構文のみは≪結び≫の異同がない。しかも江口正弘（1990）によれば，古い先行資料には『徒然草』『増鏡』にそれぞれ一例を見るのみという。結論をややさきどりしていえば，ここに≪コソ—已然形≫構文の，史的展開におけるひとつの達成を見ることが可能であろう。

この文は紛れもなく喚体句である。統語論に徹することにおいて，喚体と述体の交渉について論じた最もすぐれた論考は，森重敏と川端善明をおいてないであろう。本稿の考察は，理論的には川端（1963）に負う。(6)

さてこの喚体句は基本的には，これまた喚体句としての資格においてある二成分≪コレコソ≫≪ソヨ≫の句的相関において成立する。≪コレコソ≫≪ソヨ≫の≪コレ≫≪ソ≫はまさに個としてのそれであって概念的な指示内容ではありえない。ちなみにこの構文に認められる≪—コソ≫は≪是・あれ・鎌倉殿≫である。

係助詞≪コソ≫は係用法においてつまり≪コソ—已然形≫の呼応形式において，文の述体的実現を見るのであり，その終止用法において≪呼び掛け≫

（6）　川端善明「喚体と述体——係助詞と助動詞とその層——」（1963）

喚体としての喚体的実現を見る。平安時代における係助詞≪コソ≫のありようは，統語論的には係助詞≪コソ≫の機能的完成であったといえるであろう。

用例⑰の≪コレコソ≫は，指示の対象の個的性格において≪呼び掛け≫喚体のそれにほかならない。≪コソ≫が排他的（総記的）な意味機能をもつことは，まずこの呼格性に求めらねばならない。喚体的実現としての個的≪コソ≫≪ソ≫はそれ自体即自的である。それが文の二項成分として統合されるとすれば，それは自同判断をおいてない。≪コソ—ヨ≫の呼応関係つまり統語論的機能によって実現する喚体句をおいてないということである。一方≪コソ—ヨ≫の喚体的実現に対する述体的展開は，まず文中係助詞≪ハ≫を介するものであった。

⑱　われこそは新島もりよおきの海の荒き波風心して吹け（増鏡）

≪コソ—ヨ≫の喚体としての統語論的機能を述体のそれへと展開する可能態として，その可能性を未分節的に包含しつつ，喚体としての形態を統語論的に保持するのである。そして≪ヨ≫が断定の助動詞に，一方では対立的に，一方では同化的にとってかわられることにおいて，

⑲　あらこともかたじけなや！　これこそ太政入道殿のお孫重盛のおん嫡子三位の中将よ：この人こそは日本国のおん主ぢゃ。（巻第四・第十四317—10）

という述体句としての実現を見る。このとき≪コソ≫はもはや喚体としても，述体としても統語論的機能を喪失する。それは係助詞≪コソ≫から取り立て助詞≪コソ≫への転換でもある。さらに付言すれば，この≪コソ≫の転換が排他的（総記的）格助詞≪ガ≫の成立をうながすことにもなるのである。不変化助動詞の出現が即自的に≪コソ—已然形≫の崩壊をもたらすのでもないことは言を要しないであろう。(7)

（7）≪コソ—不変化助動詞≫には≪草の陰でもさこそ名残をしうや思はれつらう：≫など≪コソ—ツラウ≫≪コソ—ラウ≫の呼応関係がある。本質的には終助詞≪ヨ≫による≪コソ—ヨ≫と同じ構文である。喚体的統合関係にあることは言をまたないであろう。

前節において一覧したように，係助詞≪コソ≫は承接可能な文の内的成分には，広く承接した。このことは≪コソ≫の統語論的機能の強化を意味するわけでは決してない。平安時代における≪コソ—已然形≫は，主格・対格・与格に及ぶ格無標示文にかかわるものであった。格無標示文における成分の統合は，統語論的には≪コソ—已然形≫の機能に依存する。それは形式的に述体でありつつも，意味的には述体を超えて喚体である。格成分を標示する格助詞が対格≪ヲ≫・与格≪ニ≫として有標化するにつれて，文の成分間の統合関係は格助詞の統叙機能に移行する。モダリティ層を担うものとして助動詞の確立を見ることとあいまって，≪コソ—已然形≫の統語論的機能は固定化，形式化せざるをえない。

⑳　行綱清盛のもとへ参って，行綱こそ申さうずる子細あって，これまで参ったと，言はせたれば（天草版平家物語巻第一・第一・21—10）

入道相国ノ宿所西八条ヘ多田蔵人行向テ，行綱コソ申入ヘキ事候テ参リテ候ヘト申入タリケレハ

多田蔵人行綱，入道相国の西八条の亭へ参て，行綱こそ申べきこと候間，まい（ツ）て候へといはせければ

㉑　光能卿のもとにいささかゆかりがあったれば，まづそこにいって，伊豆の国の流人頼朝こそ勅勘を許されて院宣をだにくだされば，八か国の家人どもを催し集め，平家を滅ぼいて天下を治めうと，申さるると言うたれば

前右兵衛督光能卿ノ許に聊縁有リケレハソコニ行ヒテ伊豆国ノ流人前兵衛佐頼朝コソ勅勘ヲ赦レテ院宣ヲダニ玉ハハ八ケ国ノ家人共催シ集メ平家ヲ滅シテ天下ヲ静ント申候ヘ

例⑳㉑はまず，告知すべき事態を他者を介して告知するという文である。間接的告知文と呼んでおこう。告知すべき事態は，それぞれ≪行綱ガ参ッタこと≫≪頼朝ガ一ト申スこと≫である。このことがらにあって，行為対象者が告知すべき絶対的対象者と意識されるとき，その文への実現は≪行綱コソ≫

≪頼朝コソ≫と表現される。呼格の資格において係助詞≪コソ≫がその機能を果たすのである。意味的機能としての取り立てとはこのことにほかならない。(8)

主語資格においてある行為対象者が係助詞≪コソ≫によって取り立てられるとき，統語論的には文の原理的な資格における二項としての主述関係から，資格としての主語の離脱を意味する。同時にそれは係助詞≪コソ≫の統語論的機能の喪失でもあり，形態的には≪コソ―已然形≫という呼応関係の解体でもある。そして≪コソ―已然形≫の呼応関係の解体を側面から促すのが主語に対する多項的な述語の対応である。例えば㉑では，

≪頼朝――［許され・くだされ・催し集め・滅ぼいて・治めう］――申す≫

という構造になる。例⑳でさえ述語の多項的対応構造に変わりはない。

≪行綱――参って［行綱――あって・参った］――と言はせたれば≫

そしてその対極にあるのが次の文である。

㉒　何と何ととたづねられたれども，われこそお行方を存じたれと申す女房は一人もござなかった。（巻第三・第六180―11）

イカニヤイカニト申ケレ共我コソ御行末知リマイラセタリト云女房一人モヲワセス

いかにやいかにと申されけれ共，われこそ御ゆくゑしりまいらせたれと申さるる人一人もおはせず

係助詞≪コソ≫の統語論的機能の解体は，喚体的統合関係にある文が述体的統合関係においてある文へと転換することを意味する。逆にいえば，遺存する≪コソ―已然形≫は統語論的一体性を保持することで，述体的形式にもかかわらず，一層喚体的統合関係にあるということになる。

㉓　喜びの鬨をどっとつくって，六波羅へ帰ったれば，清盛これを聞いて，ようこそしたれと，ほめられた。（巻第一・第二17―9）

（8）≪取り立て≫の概念は沼田善子（1986）・寺村秀夫（1991）に準ずる。

ヨロコヒノ興ツクツテ六波羅へ帰リマイリ此由一々ニ申セハ入道相国神妙也トソノ玉ヒケル

悦の時をつくり，六波羅へこそまいりけれ。入道神妙なりとぞのたまひける。

この対応についてはもはや説明を要しないであろう。

係助詞≪コソ≫が述体的統合機能を失う，≪コソ—已然形≫の呼応関係から解放されれば，当然のことながら，連体句への介入が可能になる。連体句への介入を見れば，それは係助詞≪コソ≫の統語論的機能の縮小ないしは喪失を表わす。

㉔ そなたは歎きもなし，恨みもなし，今年はまだ十七にこそなる人が，これほどゑ土を厭うて，浄土を願はうと深う思ひおいりあったこそまことの大道心とは見えたれ（巻第二・第一107—3）

和御前ハ恨モ歎モナシ。今年ワツカニ十七ニコソナル人ノ穢土ヲ厭浄土ヲ願ント深ク思ヒ入玉ヒケルコソ実ノ大道心ト覚ヘタレ

喚体的統合関係としての係助詞≪コソ≫は，≪コソ—ヨ≫の呼応形式において統語論的に機能しえた。この形式から逸脱するとき，≪コソ≫はもはや承接成分を取り立てる機能を持つ助詞にすぎなくなる。その代償として連体句への関与性が付与されるのである。

3. ≪係り結び≫構文の近代日本語構文への関与性

近代日本語構文の成立は，述体が述体としての形式を整えるところに認知することができる。それは主格助詞≪ガ≫の有標化であり，それとの対照において係助詞≪ハ≫の定着である。係助詞≪コソ≫の消長に関する前節の原理的な考察に基づいて，本節では，近代日本語構文の成立に係助詞≪コソ≫の消長がいかなる関与性をもつかについて，具体的に述べてみようと思う。原拠本の係助詞≪コソ≫が『天草版』において変更される文に着目するという方法をとる。

原拠本の係助詞≪コソ≫が削除されるのは，取りあげるほどの意味をさして持ちえぬであろう。≪コソ≫が述体的統合関係への関与性を失えば，意味的喚体性を要しない文は容易に≪コソ≫を削除しうるはずである。

㉕　義盛さらばお旗をくだされて向はうずと申す：もっともぢゃとあって，白旗をくだされた。（巻第四・第十八339—15）

伊勢三郎左候ハ御八幡賜テ向ハント申ス尤サルヘシトテ白旗ヲコソ給ケレ

㉖　清盛その儀あるまい：妓王とうとうまかり出いとあって，お使ひをかさねて三度までたてられた。（巻第二・第一97—11）

入道相国都テ其儀有マシ義王トクトク罷出ヨト御使重テ三度マデコソ立ラレケレ

入道なんでう其儀あるまじ。祇王とうとう罷出よとお使かさねて三どまでこそたてられけれ。

成分の関係が有標の格助詞によって明示される文にあっては，係助詞≪コソ≫の削除はなおさら容易である。そしてそれは≪ク活用≫形容詞の連用成分・副詞に及ぶ。

㉗　もとよりあらがはぬうえに責めはきびしし，残りなう申したを白状四五枚にしるいて（巻第一・第三2—6）

もとよりあらがひ申さぬうへ，糺問はきびしかりけり。残なうこそ申けれ。白状四五枚に記せられ

構文史の趨勢として喚体性の後退は対格・与格を含む文の内的成分における係助詞≪コソ≫の，ひいては≪コソ—已然形≫による統合関係の後退を推進したと，まずはいうことができよう。

(1)　ＮＰ＋コソ→ＮＰ＋ハ

㉘　射そうな者はないか？　那須の与一は小兵なれども，手はきいてござる：（巻第四・第十七336—22）

射ツヘキ者ハナキカサン候。下野国那須太郎助孝カ子ニ与一助宗コソ小

兵ナレトモ手ハ叶テ候ヘ

㉙　日ごろの契約をたがへず，参ったることはまことに神妙な儀ぢゃ。

頃汝等カ重盛ニ申シ詞ノ末違ハスシテ参リタルコソ神妙ナレ

日来の契約をたがへず，まいりたるこそ神妙なれ。

主格に助詞が関与するに至るには，それ相応の内的必然性がなければなるまい。古代日本語構文にあっては，主格無標示文こそ本来の構文形式だからである。≪コソ―已然形≫構文に対比を表現する意味機能の存在を認めることができる。

㉚　東の方にも遠江の国より東こそ参らなんだれ：それよりこちの人は歴々の者どもがみんな参ったによって（巻第三・第二161―14）

東海道ニモ遠江国ヨリ東コソマイラザレ（中略）東山道ニモ近江美濃飛驒ノ者トモ参リケリ[(9)]

東海道は遠江より東はまいらず，西は皆まいりたり。

㉛　義経ほどの人こそなけれ：頼朝は何ごとをもせられず：（巻第四・第二十355―3）

サレハ九郎判定官程ノ人コソナカリケレ。鎌倉源二位殿ハ何事ヲモシ出玉ワス

いずれも現代日本語における対立主題に相当する。対立主題のもとに対比関係にあるのは益岡隆志（1991）が説くように，命題≪東ガ来ヌこと≫と≪ソレヨリコッチガ来ルこと≫の対立である。[(10)] この二項の対立に内包する関係的意味は逆態接続のそれである。≪コソ―已然形≫が内包するのもまさに関係的意味としての逆態性であり，そこにおいてまた≪コソ―已然形≫は形式の述体性を超えて喚体的統合関係にあるということになる。≪コソ―已然形≫の≪已然形≫が接続助詞によって逆態性を明示する構造に交替することにお

（9）『百二十句』の本文はこの後≪相模国ノ住人俣五郎景久伊豆国ノ住人……≫というように人名を列挙する。

(10)　益岡は≪取り立て助詞≫の機能に触れて，≪取り立て≫を命題間の範例的な関係を表すものと規定し，その機能を取り立ての焦点を表示するものとする。本稿もそれに従う。

いて，係助詞≪コソ≫は統語論的に構文機能を喪失するのは当然のことである。ここに≪コソ≫から≪ハ≫への交替における統語論的根拠が与えられるのである。

㉜　妓王うらめしと思うた道なれども，親の命をそむくまいとて，泣く泣くまた出立つ心のうちはまことに無慚な。（巻第二・第一100—16）

義王憂シト思ヒシ道ナレトモヲヤノ命ヲ背カシト泣々又出立ケル心ノ中コソ無慙ナレ

祇王，うしとおもひし道なれども，おやのめいをそむかじと，なくなく又出立ける心のうちこそむざんなれ。

この文の基本的構造は，次のような形式になる。

≪ＮＰ$_1$（妓王）＋Φ——ＮＰ$_2$（心のうち）＋ハ——ＶＰ（無慚な）≫

この構造に直接的に関与する助詞については，まず≪ＮＰ$_1$≫が無助詞であることに着目すべきである。無助詞の主格≪ＮＰ≫は，その述語≪ＶＰ≫との結合において全面的に意味関係に依存するがゆえに，曖昧な連続性においてある。≪ＮＰ$_1$≫は連体句の主格たるべく機能しつつ連体句を離脱する。その意味的離脱において≪ＮＰ$_2$≫に対立する。いわゆる≪—ハ—ガ≫構文が卓立する以前の未分化な状態を予測させる。この種の文をいま疑似≪—ハ—ガ≫構文と呼んでおこう。

≪—ハ—ガ≫構文の基本的な構造を有する文は当然存在する。助詞≪ハ・ガ≫がその機能を確定する以前の段階にあるとすれば，その基本的な構造の維持には係助詞が関与せざるをえないはずである。

㉝　平山進み出て申したは：この山の案内は私こそ知ってござれと，申せば（巻第四・第六258—24）

平山武者所季重進出テ申シケルハ此山ノ案内ハ季重コソ知テ候ヘト申ス

武蔵国住人平山武者所すすみ出て申けるは，季重こそ案内知て候へ

係助詞≪コソ≫は≪コソ—已然形≫の呼応における喚体的一体性ゆえに，二項の名詞句の間に統語論的に差異をもたらすものである。係助詞≪コソ≫が

統語論的機能を喪失すれば，つまり≪コソ―已然形≫の統合関係を解体すれば，この構文への統語論的関与性を喪失するのも当然のことであった。

(2)　ＮＰ＋コソ→ＮＰ＋ガ

室町時代は格助詞≪ガ≫が主格機能を獲得しつつある時代であった。[11] 助詞≪ハ≫に比べて限定的ではあるが，≪コソ≫と≪ガ≫の交渉を認めることができる。

㉞　さうするほどに武者がうしろに続いた：たそと問へば，平山と言ふ。（巻第四・第七263―2）

サルホトニ武者コソ後ロニ続ヒタレ誰ソ問ヘハ重季ト名乗ル

㉟　いま五十町ばかりを待ちつけさせられいで討たれさせられた宮の御運のほどがうたてい。（巻第二・第七136―7）

今五十町ハカリヲ待ツケサセ玉ハテ討レサセ玉ヘル宮ノ御運ノ程コソ憂ケレ

いま五十町ばかりまちつけ給はで，うたれさせ給けん宮の御運のほどこそうたてけれ。

㉞は現象描写であり，㉟は排他的（総記的）な文である。管見に入るかぎりでは，≪コソ≫に替わる≪ガ≫はこの二種類の文である。現象描写文の主格成分は基本的には無助詞であり，主格無標示構文である。格助詞≪ガ≫による主格標示は，≪―ハ―ガ≫構文の構造が関与しつつ，この種の文から始まると考えるものであるが，とすれば≪コソ―已然形≫の固定化・形式化の進捗状況の深さを思わせる。それは本節の冒頭で指摘したように，一体的主述関係における強調つまり意味的喚体性を要しない限り，≪コソ≫は容易に削除できるからである。

排他的（総記的）な文については，まずこの種の文において≪コソ≫の承接する判断対象成分に触れる必要がある。判断対象成分には≪ＶＰ（連体形)≫と≪ＮＰ（コト)≫とがある。

---

(11)　柳田征司（1985）「室町時代の国語」参照。

㊱　味方はみな落ち行くに，ただ一騎のこって軍をすることこそ心にくけれ。
（巻第三・第四170—16）

㊲　もしや生きてお帰りあり，僻ことでもあるかと二三日はただかりそめに出た人を待つやうに待ったことこそ悲しけれ：（巻第四・第十280—6）

この種の連体句の統語論的機能については検討すべきことが多々あるが，現象的にいえば格助詞≪ガ≫が承接するのは後者≪ＮＰ（コト）≫のみである。≪ガ≫の接続助詞化がほぼ確定することからして，この現象は当然といえるであろう。係助詞≪コソ≫はその本来的な意味機能において排他的（総記的）である。それは≪コソ≫の取り立て機能に由来する。連体句の統語論的機能の後退との相関において，格助詞≪ガ≫が排他的構文における係助詞≪コソ≫と交渉することは指摘しておいてよいであろう。しかしそれとても≪コソ—已然形≫の統語論的機能の後退，つまりは近代日本語構文における喚体的統合から述体的統合への展開の範囲を逸脱するものではありえないのである。

おわりに

日本語の統語構造が喚体的統合関係と述体的統合関係とに二分できることからすると，構文史的には喚体的統合関係から述体的統合関係への展開が志向される。その展開において最も積極的な役割を果たすのが≪係り結び≫構文である。≪係り結び≫構文はその成立において古代日本語構文に，その衰退において近代日本語構文に深くかかわってきたといえる。

本稿では，近代日本語構文の成立に，衰退期にある≪コソ—已然形≫がいかなる関与性をもつかということについて，衰退現象への統語論的解釈を通して論じてきた。その結果は次のようにまとめることができる。

(1)　係助詞≪コソ≫は承接可能な文の内的成分に広く承接するものの，固定化・慣用化の傾向が指摘でき，むしろ古態遺存という状況にある。特に無助詞成分に承接する≪コソ≫は主格に限定される。

(2) ≪コソ—已然形≫の呼応による統語論的機能は解体され，≪コソ≫の統語論的機能は喚体的統合関係に限定される。喚体としての達成が≪これコソそヨ≫という喚体的統合である。≪コソ—ヨ≫との連続において≪コソ—不変化助動詞≫の喚体的統合が定立する。係助詞≪コソ≫から取り立て助詞≪コソ≫への転換でもある。

(3) 体言性をもつ連体句の後退，≪—ハ—ガ≫構文の成立との関連において，述体的統合関係における統語論的機能は，係助詞≪コソ≫から助詞≪ハ・ガ≫に移行する。

安田章（1985）は，係助詞≪コソ≫の終焉を『天草版平家物語』の地の文における≪コソ—已然形≫の口訳者による削除と，同時代資料における挨拶表現での≪コソ—已然形≫残存とにそれぞれ見ている。(12) またロドリゲスは，『日本大文典』において，≪コソ≫を助詞及び副詞として二様に説いている。(13) このことはいずれも，統語論的機能において係助詞≪コソ≫が喚体的統合を達成するのと相補的に述体的統合における機能を喪失する過程に対応するものである。

付記　なお本稿は，拙稿「国語構文史の一側面——主格無標示構文から主格標示構文へ——」（1992　古代語の構造と展開　和泉書院）に照応するものである。

引用文献

森重　敏　1959　「日本文法通論」（風間書房）

尾上　圭介　1982　「文の基本構成・史的展開」（講座日本語学2文法史　明治書院）

高山　善行　1988　「≪係り結び≫と≪推量の助動詞≫——中古語における，文表現と助動詞層との交渉——」（語文51）

山口　明穂　1965　「中世国語における文語の研究（係結びの表現機構）」（明治書院）

(12) 地の文における≪コソ—已然形≫の削除は，≪コソ—已然形≫による喚体的統合関係から後退，つまり述体的統合関係の定立であり，挨拶表現における残存は≪コソ≫の喚体的統合の達成であると解しうる。

(13) 土井忠生訳「日本大文典」（1955）参照。

安田　章　1980　「コソの拘束力」（国語国文544）
1985　「係結の終焉」（外国資料と中世国語所収）（三省堂）
小田　勝　1989　「出現位置からみた係助詞「ぞ」」（国語学195）
大野　晋　1959　「日本語の構文(一)係助詞の役割」（文学52—12）
1960　「日本語の構文(二)～(五)係助詞の役割」（文学53—3•5•7•9）
山田　孝雄　1952　「平安朝文法史」（宝文館）
江口　正弘　1990　「天草版平家物語の『こそ』について ―― 係り結び崩壊の視点から――」（国文学攷128）
川端　善明　1963　「喚体と述体――係助詞と助動詞とその層――」（女子大文学15）
沼田　善子　1986　「とりたて詞」（いわゆる日本語助詞の研究所収）（凡人社）
寺村　秀夫　1991　「日本語のシンタクスと意味Ⅲ」（くろしお出版）
益岡　隆志　1991　「モダリティの文法」（くろしお出版）
柳田　征司　1985　「室町時代の国語」（東京堂出版）
ロドリゲス　1955　「日本大文典」（三省堂）土井忠生訳